

「古文化談叢」第86集抜刷

2021年6月

九州古文化研究会

遠賀川系土器の黒色物塗布技法の成立と展開

岡 安 雅 彦

遠賀川系土器の黒色物塗布技法の成立と展開

岡 安 雅 彦

1. はじめに

遠賀川系土器は弥生時代開始期における西日本一帯に分布する、壺・甕・鉢を中心に、蓋・高坏などから構成される斉一性の強い土器群である。稲作の波及とほぼ同時に西日本一帯に伝播し、弥生時代の開始を象徴する土器であるため、その成立・伝播、各地域における編年、製作・焼成技法、容量変化など、多方面から研究が進められてきた。一方、遠賀川系土器には、特に壺を中心にして、器面全面を黒く塗る行為（以下黒色物塗布と表記する）が広く認められる。このことについては既に戦前から認識されていたにも関わらず、それ以降積極的な研究が行われて来たとは言え、このため、この技法がいつ、どこで、どのようにして始まり、どのように展開していったのかという歴史的な展開も、黒色物が何の成分からなり、何のために塗布されたのかという技術的・用途的な問題も、あまり解明がされずに現在に至っている。

本稿は、これらの問題のうち、歴史的な展開について、その概要を提示するとともに、課題を指摘することを通じて、今後の研究の進展に資することを目的とする。

2. 研究史

弥生時代前期の土器に見られる黒色物については、古くから認識されていた。既に1943年（昭和18）に刊行された『大和唐古瀬生式遺跡の研究』において、次のように書かれている。「しからばその特徴とは如何といふに、（中略）多くは黒褐色乃至灰茶色を呈するのみならず、研磨せるものにあつては外面に黒褐色の塗抹物が染着せるものが多い。（中略）土器面の黒褐色を呈するものが、実は焼成後の塗抹にかかるものではないかと考えられる（後略）」とあり、既に戦前において弥生時代前期の土器に「黒褐色の塗抹物」（以下黒色物）が、焼成後に塗布されていることが特徴として認識されていた。

工楽善通・沢田正昭両氏は、『丁・柳ヶ瀬遺跡』の報告書において、前期弥生土器に見られる黒色物について重要な指摘をしている。以下に指摘事項を記すと、『大和唐古瀬生式遺跡の研究』で戦前から存在が指摘されていること、畿内のみならず、遠賀川系土器一般、中でも前半期に共通してみられること、既に夜白単純期に菜畑遺跡出土の壺に施されていること、赤彩とセットで用いられることが多いこと、土器の焼成後に塗られていることなどである。また、九州で見られる甕棺に黒色物が塗布されているが、前期の黒色物塗布と同じものであるのかどうかは不明とする^(2・3)。このように、黒色物塗布の認識について、両氏の分析が現在の知見としての到達点と言っても過言ではない。ただし、工楽氏が夜白単純期とした菜畑遺跡出土の壺は、底部が丸底ではなく円盤状を呈するなど新しい要素がみられることから、板付Ⅱ式とする見解もあり、黒色物塗布の技法が成立した時期に

については検討が必要である。また、黒色物塗布された資料が遠賀川系土器の中でも前半期に共通してみられるが、全般にみられるとする点は、根拠となる資料の提示がされていない点が残念である。

佐原眞氏は、唐古遺跡の報告書で弥生土器の壺に有機質材料を入れた黒色塗抹物が塗られていることが報告されていることを指摘し、板付Ⅰ式の壺に黒色に塗ったものがあること、近畿ではⅡ期の櫛描文の壺にもあること、Ⅲ期の甕棺にも黒塗りのものがあり、甕棺の黒塗りは精神的な意味を持つと推定している⁽⁵⁾。

黒色物の成分については、安田博幸・奥野礼子両氏が科学的な分析を行っている。それによると、この黒色物は、ベンゼンなどの有機溶媒に溶けない事、熱濃硫酸・熱濃硝酸で分解されない事、ルツボ上で加熱すると灰褐色に変化する事から、アスファルト・漆ではなく、「炭素様の物質」であると報告している。そして、「黒色物質は炭末そのものあるいは炭末に粘土などをわずかに混ぜ、粘着性をもたせ、土器に塗布したうえ、研磨したものではないかと考えられる。」とする⁽⁶⁾。また、塗布行為が焼成前に行われたのか、焼成後に行われたのかについては明確な記述はないが、塗布後に研磨を想定しているところから、焼成前に塗布していたと考えているようである。

また、工楽善通・沢田正昭両氏は、前掲書において、この黒色物質について、塗抹物は土器の表面とは明瞭な境界があるため、土器の焼成後に塗布されたものであること、X線マイクロアナライザーで炭素の分析を行ったところ、純粋な炭や煤とするほどの量ではないことから、粘土に煤などを混ぜたものである可能性があると^(前掲註2)する。

いずれの成分分析も、炭素様の物質、純粋ではないが炭素と何らかの物質を混ぜたものとして、炭素が成分を構成する物質であるとしているが、炭素が何に由来しているものであるのかまでは言及されていない。

3. 黒色物の特徴

黒色物を塗布した資料は、夜白式や突帯文系の壺にも見られるが、最も多く見られる遠賀川系土器であり、ごく少量であるが、中期の資料にも見られる。器種による差は明確で、壺を中心に塗布されている。中・小型の壺に施されることが多いが、板付Ⅰ・Ⅱ式の壺の中には、大型壺に施されることもある。壺蓋・鉢にも見られるが、甕や甕蓋にはほとんど見られない。しかし、確認例は少ないが、遠賀川系土器以外にも新町遺跡（写真8）では夜白式土器に、また鳥取県本高弓ノ木遺跡・島根県矢野遺跡等では遠賀川系土器に伴う突帯文系土器にも施されることもあるようだ。色調は、残存状況が良好であれば光沢のある黒色を呈するが、残存状況の悪いものは、こげ茶色を呈するものも少なくない。漆と違って膜状を呈することはなく、厚さはほとんど感じられない。塗布された黒色物は土器の内部には浸透はせず、表面にのみ薄く付着している（写真2）。塗布される範囲は、外面は全面が基本である。内面は、全面に施されるものがある他は、口縁部途中まで施されることが確認できるものはわずかで（写真1・6）、丹塗り磨研の壺に施された赤彩と比べて、塗布されていない部分との境界がはっきりとしない場合がほとんどである。壺の内面には、液体が垂れている痕跡がある（写真1・7）ことから、焼成後に液体状の物質を塗布していると考えられるが、こうした状況が観察出来ることは極めて希である。しばしば赤彩と組み合わせて施されること

がある（写真12・13）が、黒色物塗布後に赤彩が施されている。一定程度の粘着力はあるが、それほど強くはないため、埋没環境等、外的要因により一部ないしは大部分が剥がれている場合も少なくなく（写真4・5）、器表面の残存状況が悪い場合は観察できないことも多い。外的環境によって残り方に差が出てしまう属性であるため、単純に現時点での構成比率から比較検討ができないことは注意が必要である。

4. 他の黒色物質との区別

観察の際に、黒斑・コゲ・漆塗り・黒色焼成などの、他の黒い物質との区別については、次のように考えている。黒斑は表面だけではなく、内部にまで浸透しており、器表面が剥がれてしまっている場合でも残っている。煤は粒状感があり、触れた場合に手に付着することがある。漆塗りは、断面で見た場合、薄い膜状を呈している。黒色物はこのような特徴を有しておらず、比較的明瞭に区別することが出来る。しかし、黒色焼成との区別は容易ではない。黒色物塗布の場合、内部に浸透することはないため、剥がれた部分は土器焼成時の色調が現れている（写真1・4・5）。黒色焼成は、土器の内部に浸透している場合と、浸透していない場合とがある。断面観察で内部に浸透している場合、表面が摩滅していても摩滅した部分が灰色を呈し（写真3）、黒色焼成と判断出来るが、浸透していない場合は、目視では確定させることは現状困難であるが、資料全体を見て判断するしかない。ここでは浸透の有無を黒色物塗布と黒色焼成の識別の基準とし、断面に浸透が確認できれば黒色物と判断するが、厳密な判定については将来的な検討課題である。

5. 各地域の黒色物塗布資料の概要

黒色物塗布の技法は、管見の限りでは玄界灘沿岸以東の夜白式土器および、遠賀川系土器の分布する範囲のかなりの地域で確認出来る。以下個別に遺跡ごとの状況を概観する。

時期については夜白～板付1式を最古段階、それ以降を、段・削り出し突帯・貼り付け突帯を基準にそれぞれ古・中・新段階としたが、大阪を除く近畿と東海地方は段を持つ資料であっても中段階としている。各地で遠賀川系土器が出現する時期を板付2式・古段階とした。また、特に断りのない限り、壺の比率を述べている。黒色物の判断は、内部に浸透していないもので、全体に見られるものはもちろん、沈線内のみ残存しているものも黒色物塗布された資料と判断した。また黒色物かどうか判断に迷う資料については塗布なしとしてカウントした。観察した遺跡単位の資料群のうち、明らかに表面が摩滅しているものを外し、黒色物塗布が認められた個体数を全体数で除し、小数点第1位を四捨五入した。

菜畑遺跡（佐賀県唐津市）

資料群としての調査はしていないが、工楽善通・沢田正昭両氏が指摘した赤彩を伴う壺（図1-4）黒色物塗布後に彩文が施されている可能性が高い。この壺以外にも数点の黒色物塗布と考えられる資料がある。両氏はこの壺の時期を夜白単純期としているが、出土層位や形体から板付1式を伴う夜白式新段階の資料であろう。

新町遺跡（福岡県福岡市）

全て支石墓の副葬小壺で、使用目的がわかる稀な例である。小壺 20 点中、10 点に黒色物塗布が見られる。夜臼系・板付系のいずれにも確認出来る（図 1-1～3）。夜臼系は 11 点中 6 点の 55% が黒色物塗布資料で、丹塗り磨研・黒色磨研各 1 点となる。板付系は確認出来る 3 点はいずれも黒色物塗布が施されている。両者の折衷系は 6 点中確実に黒色物塗布と判断出来る資料はなかった。時期的にはほぼ夜臼式新段階～板付 I 式期に収まると考えられる。

曲り田遺跡（福岡県福岡市）

筆者は未確認であるが、橋口達也氏は黒色物を黒色磨研と明確に区別し、報告書では「黒塗り磨研」として、黒色磨研とは別に記述している。報告書によれば、壺 320 点中 18 点、6% に黒色物塗布資料が存在するという⁽⁷⁾。曲り田遺跡出土資料は、夜臼古段階から板付 I 式までを含んでおり、時期に幅があるが、橋口氏が黒色物塗布資料としたものについては、その多くは夜臼式の中でも新しい段階の資料であると考えられる。

野多目遺跡（福岡県福岡市）

資料群としての調査はしていないが、1 点赤彩を伴う黒色物塗布された小壺が確認できる（図 1-5）。全面を黒色物塗布した後、赤色顔料で文様を施している。時期は夜臼新～板付 I 式とされる。

板付遺跡（福岡県福岡市）

板付遺跡 G-7a・7b 調査区環濠資料は夜臼～板付 I 式期の基準資料で、上・中・下層の 3 層に区分され、下層が夜臼 I 式、中層が夜臼 II A、上層が夜臼 II B / 板付 I 式に比定されている。これらのうち、上層出土の夜臼 II B / 板付 I 式期の壺には 21 点中 11 点、52% に黒色物塗布が見られる（図 1-8～15）。うち 2 点は夜臼系の壺と思われる（図 1-10・11）。中・下層出土資料には明瞭な黒色物塗布資料は見られない。

雀居遺跡（福岡県福岡市）

資料群としての調査はしていないが、4 次調査で 1 点（図 1-7）、5 次調査で各 1 点（図 1-6）確認できる。図 1-7 は地紋に黒色物を塗布し、口縁部～胴部にかけて彩文を施している。6 は板付 II 式古段階、7 は板付 I 式新段階とされる。

小路遺跡（山口県山口市）

古段階とされる第 12 号溝状遺構出土資料 19 点を実見した。黒色物塗布の可能性のある資料が 1 点あるのみで、明確な黒色物塗布資料は確認出来なかったが、表面がかなり摩滅しており、当時の状態を示しているのとは言い難い。

居徳遺跡（高知県土佐市）

晩期末～前期中段階の資料を実見した。晩期系の土器は、壺・鉢共に大半の資料が黒色を呈している。壺の一部には、断面で黒色が非常に薄く感じられるものもあり、黒色物塗布の可能性のあるものも存在するが、多くは断面観察で内部まで黒色化していることから、基本的に黒色焼成と判断した。遠賀川系土器は、わずかに古段階の資料を含むが、中段階に比定される資料が大半を占める。古段階の資料に 10 点中 1 点、10%、中段階の資料に 43 点中 2 点、5% の黒色物が塗布されたものが確認出来る。

田村遺跡（高知県南国市）

古・中段階の資料を実見した。古段階は127点中4点、3%、中段階は21点中0点、0%の資料に黒色物塗布が確認出来た。ただ、前述のように全体的に資料の摩滅が著しいため、小路遺跡と同様にこの比率が当時の状態を示しているのとは言い難い。

矢野遺跡（島根県出雲市）

前期古段階の資料を中心に、中・新段階の資料も含む。古段階は76点中46点、61%、中段階は16点中6点、38%、新段階は13点中8点、38%の資料に黒色物塗布が確認出来た。壺以外の器種では、数は少ないが高坏2点中2点に確認出来た他、鉢で29点中5点、甕蓋12点中1点に黒色物塗布が確認出来た。また、1点のみであるが、突帯文系土器の中にも黒色物を塗布した資料が確認出来た。

西川津遺跡（島根県松江市）

古・中・新段階の資料を実見した。古段階は25点中17点、68%、中段階は52点中31点、60%、新段階は46点中22点、48%の資料に黒色物塗布が確認出来た。

本高弓ノ木遺跡（鳥取県鳥取市）

古段階の資料を実見した。37点中9点、24%の資料に黒色物塗布が確認出来た。また、突帯文系土器の中にも黒色物を塗布した資料が存在する。このうち壺は37点中6点、16%である。

大宮遺跡（広島県福山市）

中・新段階の資料を実見した。中段階は36点中4点、11%、新段階は33点中1点、3%の資料に黒色物塗布が確認出来た。壺以外の器種では壺蓋3点中1点に黒色物塗布が確認出来た。

津島南池遺跡（岡山県岡山市）

古・中段階の資料を実見した。古段階は46点中13点、28%、中段階は6点中3点、50%の資料に黒色物塗布が確認出来た。

大開遺跡（兵庫県神戸市）

古段階の資料を実見した。確認出来たのは99点中1点1%のみである。ただし、大開遺跡の資料は摩滅が著しく、当時の比率を表しているのとは言い難い。

本山遺跡（兵庫県神戸市）

古・中・新段階の資料を実見した。古段階は39点中34点、87%、中段階は16点中13点、81%、新段階は33点中22点、67%の資料に黒色物塗布が確認出来た。壺以外の器種では、甕22点中3点に黒色物塗布が確認出来た。

戎町遺跡（兵庫県神戸市）

新段階の資料を実見した。20点中17点、85%の資料に黒色物塗布が確認出来た。

讃良郡条里遺跡（大阪府四条畷市）

古段階の資料を実見した。かなり磨滅した資料が多く、黒色物の残りも悪いが、古段階は29点中11点、38%の資料に黒色物塗布が確認出来た。壺以外の器種では、鉢2点中2点に確認出来た。

若江北遺跡（大阪府八尾市）

古・中段階の資料を実見した。古段階は57点中12点、21%、中段階は13点中8点、62%の

資料に黒色物塗布が確認出来た。壺以外の器種では、鉢7点中1点に確認出来た。

山賀遺跡（大阪府東大阪市）

中・新段階の資料を実見した。中段階は52点中33点、63%、新段階は新段階は9点中4点、44%の資料に黒色物塗布が確認出来た。壺以外の器種では、鉢4点中4点、壺蓋15点中7点に確認出来た。

東奈良遺跡（大阪府茨木市）

中・新段階の資料を実見した。中段階は55点中32点、58%、新段階は新段階は9点中4点、44%の資料に黒色物塗布が確認出来た。壺以外の器種では、壺蓋10点中3点に確認出来た。

唐古・鍵遺跡（奈良県田原本町）

中・新段階の資料を実見した。中段階の土器は、奈良盆地では最古段階とされるSR201をはじめ、大和1-2様式までの土器を実見した。SR201は壺18点中14点、78%の資料に黒色物塗布が確認出来たが、1-2様式の土器も含めた全体では、84点中45点の54%であった。壺以外の器種では、高坏・壺蓋各1点ずつに確認出来た他、甕も6点中5点が黒色物塗布である可能性がある。大和2様式では、21点中12点の57%の土器に黒色物塗布が確認出来た。

雲宮遺跡（京都府長岡京市）

中・新段階の資料を実見した。40点の壺に黒色物塗布が確認出来た。報告書掲載分のうち、黒色物塗布が見られる資料の数のみをカウントしたため、比率は不明である。仮に報告書に掲載されている壺の総数417点を分母とすると10%であり、これが最小の比率となる。壺以外の器種では、壺蓋3点中2点に黒色物塗布が確認出来た。

丸山河床遺跡（福井県小浜市）

中・新段階の資料を実見した。中段階は70点中26点、37%、新段階は30点中13点、43%の資料に黒色物塗布が確認出来た。

靈仙寺遺跡（滋賀県栗東市）

中・新段階の資料を実見した。中段階は32点中25点、78%、新段階は16点中13点、81%の資料に黒色物塗布が確認出来た。壺以外の器種では、鉢2点中1点、壺蓋3点中1点に黒色物塗布が確認出来た。

川崎遺跡（滋賀県長浜市）

中・新段階の資料を実見した。中段階は壺54点中40点、74%、新段階は14点中11点、79%の資料に黒色物塗布が確認出来た。壺以外の器種では、鉢2点中1点、甕蓋3点中1点に黒色物塗布が確認出来た。

針江浜遺跡（滋賀県高島市）

中・新段階の資料を実見した。中段階は65点中51点、78%、新段階は79点中57点、72%の資料に黒色物塗布が確認出来た。壺以外の器種では、鉢33点中7点、壺蓋5点中3点、甕蓋9点中1点に黒色物塗布が確認出来た。

納所遺跡（三重県津市）

前期中・新段階の資料を実見した。中段階は、190点中115点、61%、新段階は79点中28点、

35%の資料に黒色物塗布が確認出来た。うち、在地型の遠賀川系土器である金剛坂式の壺は、31点中5点に確認出来た。壺以外の器種では、鉢20点中8点、壺蓋16点中11点、甕蓋5点中2点に黒色物塗布が確認出来た。

中ノ庄遺跡（三重県松阪市）

中・新段階の資料を実見した。中段階は40点中1点、2%、新段階は6点中1点、17%の資料に黒色物塗布が確認出来た。

金剛坂遺跡（三重県明和町）

中・新段階の資料を実見した。中段階は5点中2点、40%、新段階は6点中1点、17%の資料に黒色物塗布が確認出来た。

上箕田遺跡（三重県鈴鹿市）

中・新段階の資料を実見した。中段階は4点中0点、0%、新段階は6点中1点、17%の資料に黒色物塗布が確認出来た。

荒尾南遺跡（岐阜県大垣市）

中・新段階の資料を実見した。中段階は96点中63点、66%、新段階は45点中30点、67%の資料に黒色物塗布が確認出来た。また、在地型の遠賀川系土器である金剛坂式の壺は、18点中11点に確認出来た。壺以外の器種では、鉢8点中4点、壺蓋6点中3点に黒色物塗布が確認出来た。

宮塚遺跡（岐阜県各務原市）

中・新段階の資料を実見した。中段階は17点中0点、新段階は3点中0点という結果であったが、摩滅が進んでいるものが多く、当時の状態を示しているのとは言い難い。

三ツ井遺跡（愛知県一宮市）

中段階の資料を実見した。19点中、4点、21%の資料に黒色物塗布が確認出来た。壺以外の器種では、壺蓋4点中1点に黒色物塗布が確認出来た。

八王子遺跡（愛知県一宮市）

中・新段階の資料を実見した。中段階は34点中5点、15%、新段階は18点中7点、39%の資料に黒色物塗布が確認出来た。壺以外の器種では、壺蓋7点中2点に黒色物塗布が確認出来た。

元屋敷遺跡（愛知県一宮市）

中・新段階の資料を実見した。中段階は56点中21点、38%、新段階は27点中15点、56%の資料に黒色物塗布が確認出来た。壺以外の器種では、壺蓋12点中1点に黒色物塗布が確認出来た。

朝日遺跡（愛知県清洲市・名古屋市）

中・新段階の資料を実見した。中段階は44点中8点、18%、新段階は51点中14点、27%の資料に黒色物塗布が確認出来た。在地型の遠賀川系土器である金剛坂式の壺は、15点中1点に確認出来た。壺以外の器種では、鉢16点中2点、壺蓋25点中5点、甕蓋6点中1点に黒色物塗布が確認出来た。

月縄手遺跡（愛知県名古屋市）

中・新段階の資料を中心に実見した。中段階は25点中10点、40%、新段階は4点中1点、25%の資料に黒色物塗布が確認出来た。

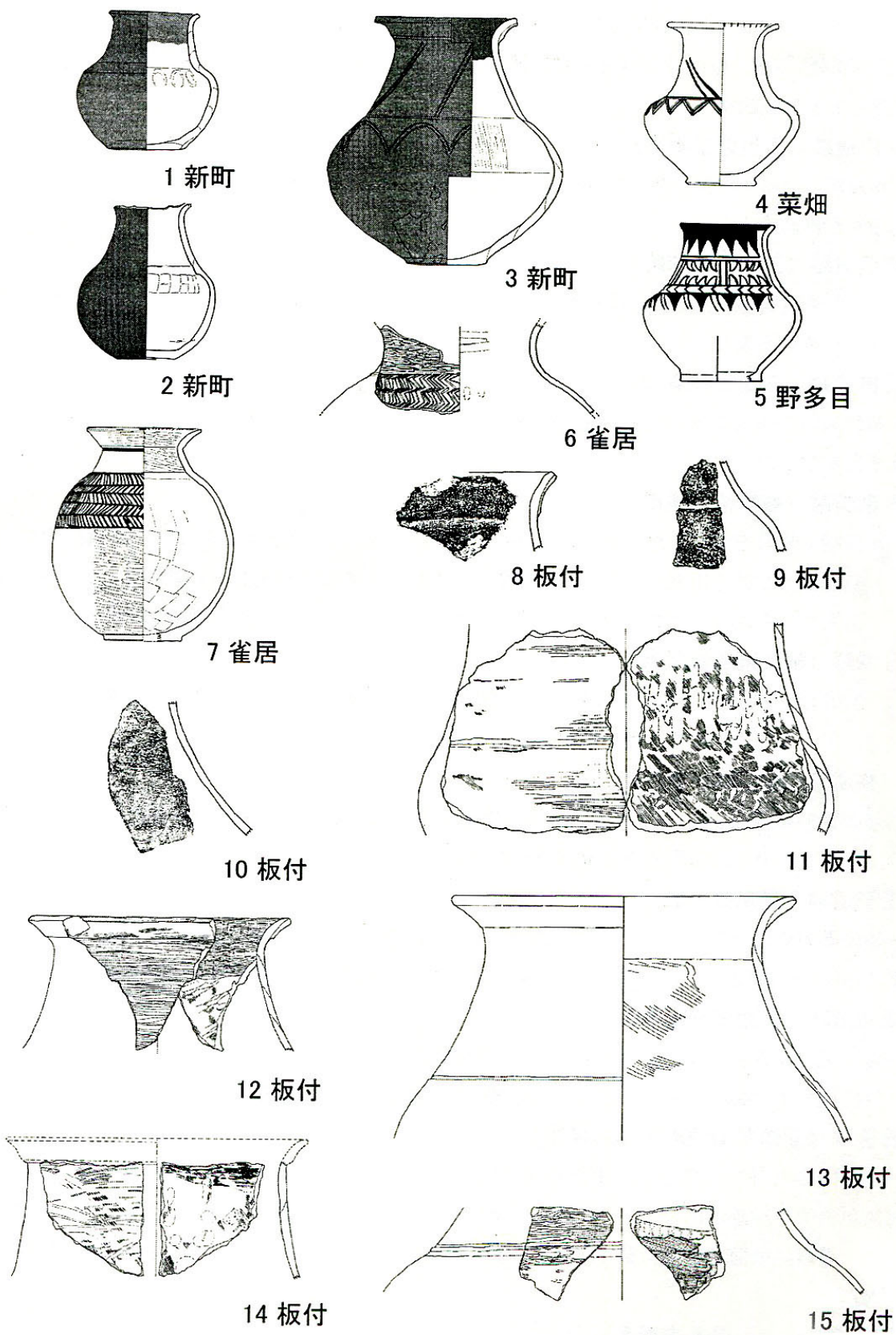


図1 北部九州における夜臼新・板付I式期の黒色物塗布資料（6を除く）

S=1/5(1~5、7~10) S=1/6(6、11~15)

松河戸遺跡（愛知県春日井市）

中・新段階の資料を実見した。中段階は34点中22点、65%、新段階は10点中2点、20%の資料に黒色物塗布が確認出来た。壺以外の器種では、鉢2点中1点、壺蓋8点中5点に黒色物塗布が確認出来た。

生石Ⅱ遺跡（山形県酒田市）

新段階の類遠賀川系土器の資料を実見した。53点中11点、21%の資料に黒色物塗布が確認出来た。壺以外の器種には黒色物塗布は確認出来なかった。

6. 夜臼式～板付Ⅰ式期の北部九州における黒色物が塗布された土器

以上、夜臼式土器・遠賀川系土器（板付Ⅰ式を含む）を中心とした黒色物塗布資料の状況について概観した。黒色物塗布を日本全体で考察するには地理的にも時間的にも調査が不十分であることは承知しているが、あくまでも調査した範囲内という前提で現状認識と展望を述べてみたい。なお、曲がり田遺跡は未確認ではあるが、この時期のこの地域の資料数が絶対的に少ないこともあり、ここで取り扱っていくこととする。

現状では玄界灘沿岸地域の菜畑遺跡・曲がり田遺跡・新町遺跡・板付遺跡・野多目遺跡出土の夜臼式新段階・板付Ⅰ式古段階の土器が最も古い黒色物塗布資料である（これらが前後関係にあるのか、同時存在なのかは難しく、ここでは一つの時期区分単位として扱っていく）。

曲り田遺跡出土遺物には、壺以外にも浅鉢で276点中29点、11%に黒色物塗布が見られると報告されており（前掲註7、比率は筆者算出）、他器種についても見られるようだ。また、新町遺跡の黒色物塗布資料は、夜臼系で6点、板付系で3点確認出来る。また、1点のみであるが、福岡市野多目遺跡で夜臼系壺に赤彩を伴う黒色物塗布資料が存在する（図1-5）。この資料は、下地に黒色物を塗布した後、赤彩を施しており、時期は夜臼式から板付Ⅰ式への過渡的なものと評価されている。板付Ⅰ式期の資料には、板付遺跡のG7 a b区上層出土遺物があり、黒色物塗布されたものが52%の高率でまとまって出土している（図1-6～13）。ただ、板付遺跡においても確認できた資料点数はそれほど多くはなく、板付遺跡・新町遺跡以外ではほとんど未調査であり、わずかに福岡市新町遺跡（図1-3）、雀居遺跡（図1-7）で黒色物塗布された資料が数点確認出来た程度である。なお、雀居遺跡では、時期は降るが図1-6の資料にも黒色物塗布が確認できる。

また、橋本一丁田遺跡の資料には、明瞭な黒色物塗布の資料は見られなかった。また、雀居遺跡4次・5次調査資料についても確認できたのは時期の降る図1-6のみであり、夜臼式期の資料の多くは、断面で見ると表面だけではなく内部にまで炭素が浸透していることから、

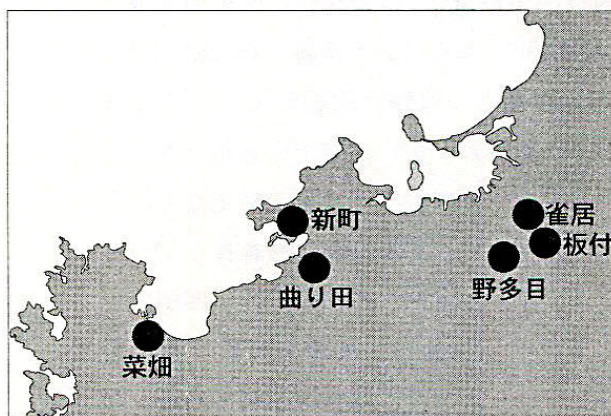


図2 玄界灘沿岸の夜臼新段階・板付Ⅰ式期の黒色物塗布資料出土遺跡

基本的に黒色焼成（黒色磨研）によるもので、一部に黒色物塗布の可能性のあるものも存在するが少数であると考えている。

このように、この段階で黒色物塗布資料が少ないのは、調査した遺跡数が絶対的に少なく、なおかつ確認できた資料点数も非常に限られている以外に、遠賀川系土器が基本的に覆い焼きで明るい発色が基本であるために、黒色物塗布は比較的判断しやすいのに対して、中・小型の夜白系土器は黒色磨研されたものも一定量存在しており、黒色物塗布であるのか、黒色焼成であるのかの区別が付きにくいことをも一因である。他の遺跡でどれくらい存在するのか、また夜白新段階に先行する時期に黒色物塗布技法が遡るのかについては、今後の調査によるところが大きい、この段階ではまだ非常に少数である可能性が高いと考えている。

以上のことから、黒色物塗布の技法は夜白新段階・板付Ⅰ式期に、玄界灘沿岸一帯の地域で始まったと考えられるが、しかし、これらの資料が本州で出土している黒色物塗布された遠賀川系土器に先行することは間違いなく、この技術が遠賀川系土器に受け継がれて波及する際に、同時に伝播していった可能性が高いと考えられる。ただ、夜白新段階・板付Ⅰ式期はまだそれほど多くは存在せず、萌芽が見られる段階である。なお、その後の玄界灘沿岸一帯における黒色物塗布の展開については未調査であるが、板付Ⅱ式にも一定量は存在しているようである⁽⁹⁾。

7. 黒色物塗布技法の展開

遠賀川系土器波及の初期段階では、量比は別として大阪湾岸、日本海側では鳥取県にまで見ることが出来る。一方、九州中・南部の板付系の土器にはあまり見られない。調査地域が近畿・東海地方に偏っているため、確証はないが、矢野遺跡・西川津遺跡（島根県）、本山遺跡（兵庫県）では50%以上に黒色物塗布が見られる一方、若江北遺跡・讃良郡条里遺跡（大阪府）、津島南池遺跡（岡山県）、本高弓ノ木遺跡（鳥取県）では30%程度と、遺跡・地域によりばらつきが見られるが、広い地域で一定量存在していることは明らかで、遠賀川系土器の波及した地域には、初期段階から存在している。また、東北部九州・西部瀬戸内・四国については黒色物塗布の状況を調査できた遺跡がほとんどなく、様相は不明である。なお、小路遺跡（山口県）、大開遺跡（兵庫県）、田村遺跡（高知県）で極端に少ない

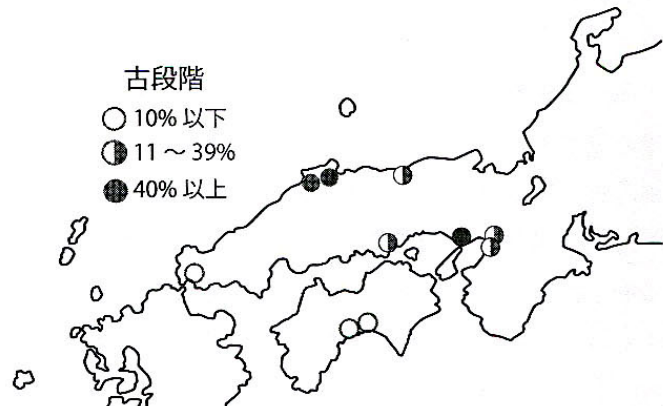


図3 古段階の黒色物塗布資料出土遺跡
筆者が調査した分のみを反映した図であるので、ここに掲載されていない地域・遺跡には黒色物塗布資料が存在しないのではないことに注意。以下同。

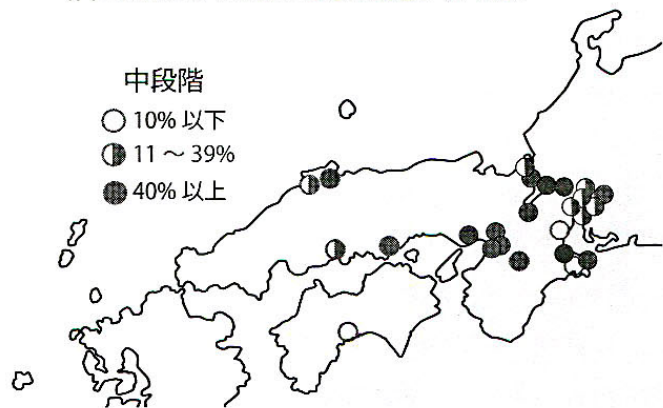


図4 中段階の黒色物塗布資料出土遺跡

のは、土器の表面が摩滅しているためであり、少ないことに着目するのではなく、僅かであっても存在しており、黒色物塗布技法が情報として伝わっていることに意義があると考えたい。

中段階になると、近畿・東海地方では多くの遺跡で黒色物塗布が確認出来るようになり、黒色物塗布の比率も高くなる。調査遺跡数が限られるが、大阪平野（東奈良遺跡 58%・山賀遺跡 63%）・奈良盆地（唐古・鍵遺跡 54%）・琵琶湖沿岸（霊仙寺遺跡 78%・川崎遺跡 74%・針江浜遺跡 78%）・伊勢湾西岸（荒尾南遺跡 66%・納所遺跡 61%）の各地で、かなりの比率で黒色物塗布資料が確認出来る。唐古・鍵遺跡は、最古段階の 66 次 SR201 に限れば、18 点中 14 点、78% となる。また、日本海側では、若狭湾沿岸の丸山河床遺跡（37%）でも確認出来る。一方、伊勢湾東岸の濃尾平野では大規模遺跡である朝日遺跡（愛知県）では 18% とあまり目立たず、逆に遠賀川系土器が主体的に出土する太平洋側の最東端の遺跡となる松河戸遺跡（愛知県）では 65% と高率である。この他伊勢湾沿岸では、月縄手遺跡（40%）・元屋敷遺跡（38%）・三ツ井遺跡（21%）・八王子遺跡（15%）（以上愛知県）、中ノ庄遺跡（2%）・上箕田遺跡（0%）（以上三重県）といったように、同一地域においてもばらつきが大きい。一方、近畿地方よりも西側の地域については、筆者の調査事例が少ないため、動向は明らかではないが、大宮遺跡（広島県）では 11%、居徳遺跡（高知県）では 5% と少ない。これが瀬戸内・四国の一般的な状況であるのかどうかは、さらに事例を増やしていく必要がある。

新段階には、黒色物塗布の比率が低下する遺跡も見られるが、基本的には中段階と同様の傾向で、依然として近畿・東海地方では数多く見られる。また、中国地方の大宮遺跡では、新段階においても 3% と低調である。

日本海側では、新段階に位置付けられる生石Ⅱ遺跡（山形県）で 21% の壺に黒色物塗布が認められ、中期の若狭湾沿岸からさらに北にまで波及していることが確認出来た。日本海沿岸を飛び石伝いに伝えられたとすれば、その間に位置する石川・富山・新潟県においても量的にはともかく、黒色物塗布技法は伝わっている可能性があるのではないだろうか。

以上のように、黒色物塗布技法は、玄界灘沿岸一帯で夜臼式期には成立するが、比率としてはわずかであり、本格的に普及するのは遠賀川系土器の波及段階である。一部遠賀川系土器に共伴する突帯文土器にも見られるが、基本的に遠賀川系土器に見られる特徴であることから、この技法は、外形接合・覆い焼き・容量の規格化等と共に、遠賀川系土器に特徴的な属性の 1 つとして取り入れられて伝播していき、それに伴って在地の突帯文土器にも影響を与えている可能性が現時点では高いのではないだろうか。

繰り返しになるが、注意していただきたいのは、図 2～5 はあくまでも調査した遺跡の分布図であり、空白の地帯には黒色物塗布技法が伝播していないというわけではない。恐らく遠賀川系土器

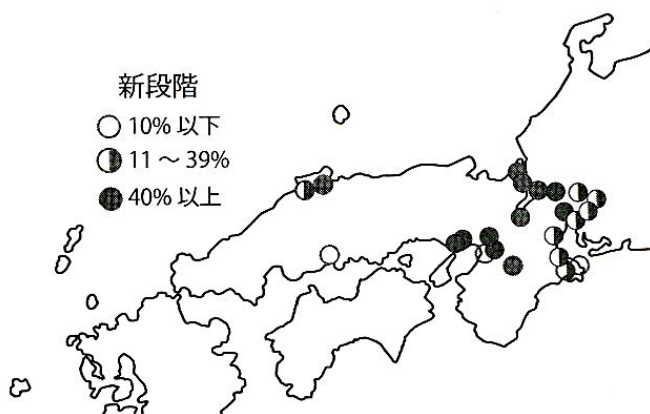


図 5 新段階の黒色物塗布資料出土遺跡

遺跡名	壺				鉢	壺蓋	甕蓋
	夜臼・板付Ⅰ	古段階	中段階	新段階			
新町	50%(10/20)						
曲り田※	6%(18/320)						
板付	52%(11/21)		—	—			
小路		0%(0/19)					
居徳		10%(1/10)	5%(2/43)	—			
田村		3%(4/127)	0%(0/21)	—			
矢野		61%(46/76)	38%(6/16)	38%(8/13)	15%(5/29)	0%(0/1)	8%(1/12)
西川津		68%(17/25)	60%(31/52)	48%(22/46)			
本高弓ノ木		24%(9/37)	—	—			
大宮		—	11%(4/36)	3%(1/33)	0%(0/1)	33%(1/3)	0%(0/1)
津島南池		28%(13/46)	50%(3/6)	—			
大開		1%(1/99)					
本山		87%(34/39)	81%(13/16)	67%(22/33)			
戒町		—	—	85%(17/20)			
讚良郡条里		38%(11/29)	—	—	100%(2/2)	—	—
若江北		21%(12/57)	62%(8/13)	0%(0/1)	14%(1/7)	—	—
山賀		—	63%(33/52)	44%(4/9)	100%(4/4)	47%(7/15)	0%(0/4)
東奈良		—	58%(32/55)	44%(4/9)	0%(0/1)	30%(3/10)	0%(0/1)
唐古・鍵		—	54%(45/84)	57%(12/21)	25%(1/4)	83%(5/6)	—
丸山河床		—	37%(26/70)	43%(13/30)	—	—	—
靈仙寺		—	78%(25/32)	81%(13/16)	50%(1/2)	33%(1/3)	0%(0/1)
川崎		—	74%(40/54)	79%(11/14)	50%(1/2)	0%(0/1)	33%(1/3)
針江浜		—	78%(51/65)	72%(57/79)	21%(7/33)	60%(3/5)	11%(1/9)
納所		—	61%(115/190)	35%(28/79)	40%(8/20)	41%(11/16)	40%(2/5)
中ノ庄		—	2%(1/40)	17%(1/6)	0%(0/3)	0%(0/6)	0%(0/2)
金剛坂4次		—	40%(2/5)	0%(0/3)	0%(0/2)	0%(0/2)	—
上箕田		—	0%(0/4)	17%(1/6)	—	0%(0/2)	—
荒尾南		—	66%(63/96)	67%(30/45)	50%(4/8)	50%(3/6)	0%(0/7)
宮塚		—	0%(0/20)	0%(0/3)			
三ツ井		—	21%(4/19)	—	0%(0/6)	25%(1/4)	—
八王子		—	15%(5/34)	39%(7/18)	0%(0/4)	29%(2/7)	0%(0/1)
元屋敷		—	38%(21/56)	56%(15/27)	—	8%(1/12)	0%(0/5)
朝日		—	18%(8/44)	27%(14/51)	13%(2/16)	20%(5/25)	17%(1/6)
月縄手		—	40%(10/25)	25%(1/4)	0%(0/2)	0%(0/4)	—
松河戸		—	65%(22/34)	20%(2/10)	50%(1/2)	63%(5/8)	0%(0/1)
生石Ⅱ		—	—	21%(11/53)			

表1 遺跡ごとの器種・時期別黒色物塗布の比率（曲がり田遺跡は参考、数字は黒色物塗布資料数／観察個数）

の波及範囲には、濃淡の差はあれ、当初から一定量は存在しているが、特に盛行するのは中・新段階の近畿・東海地方というのが実態に近いのではと考えている。

なお、黒色物塗布技法は、中期になると、非常に少なくなる印象を持っているが、調査は出来ていないため不明である。この点についても今後の調査に負うところが大きい。

8. 黒色物塗布の意図と用途

「土器を黒く見せる」手法として、なぜ縄文晩期の黒色磨研や漆の塗布といった在来の技法を踏

襲せず、黒色物塗布という新たな技法を選択したのであろうか。現状ではこの問いに対する答を持ち合わせていないが、北部九州の地で独自に生み出されたと考えるには、既にある黒色磨研・漆塗布ではなく、新たに黒色物塗布という手法を採用する理由が想定しづらい。朝鮮半島から伝えられた技法であるとする方が理解しやすいが、これは現在の認識からの想像でしかないし、資料調査も行っていないため、北部九州・朝鮮半島の資料を丹念に調べた上で、改めて考えていくしかないであろう。

具体的な使用方法についても、現状の出土状況からは、これらの塗布目的・使用方法を推測することは難しい。出現期において曲り田遺跡では住居址から出土している一方、新町遺跡では墓壙から副葬品として出土するなど、資料数が少ないものの、現状では遺構の性格による出土傾向の偏りは見られないようだ。また、遺跡によっては相当数の土器に見られること、流路などからも普通に出土していることから、希少性はなく、特別な扱いをされているとは考えられないこと、赤色顔料と組み合わせていることがしばしば見られることから、祭祀的な意味と言うよりも、視覚的・装飾的な意味が大きいのではないだろうか。

9. 今後の課題

研究史で述べたように、黒色物塗布の技法は、既に戦前の唐古・鍵遺跡の資料において認識されていたにも関わらず、その後それほど関心が払われずに今日に至っている。しかし、今回指摘したように、この技法は福岡平野において、夜臼新段階・板付Ⅰ式期に最初に採用されたものの、この段階ではまだそれほど普及はせず、遠賀川系土器が東方に拡散していく際に、その属性の1つに取り入れられて一気に盛行した可能性が高い。北部九州では、夜臼新段階・板付Ⅰ式期にそれなりに取り入れられたとはいうものの、板付Ⅱ式期においてもそれほど普及したとは言えず、黒色物塗布技法は遠賀川系土器においてこそ発達・盛行するのである。現状では調査に偏りがあり、確認出来ていない地域も多いが、黒色物塗布の技法は、土器の表面の残存状況に大きく左右されるため、出土した資料から観察できる以上に当時は多用されていた技法であることは間違いなく、出雲・近畿・東海地方では壺を中心に、かなりの高率で土器が黒く仕上げられていたであろう。また、図では表現されていないが、北部九州・中部瀬戸内・四国においても存在しなかったわけではなく、一定量は存在していたであろう。

以上のように、黒色物塗布技法は、遠賀川系土器の成立段階から広範囲に存在する一方、中・新段階には特に近畿・東海地方において盛行する技法であるとの見通しを得ることができた。しかし本稿は、この問題に対して改めて注目し、見通しを述べたに過ぎない。まだ解決すべき課題は多く、以下にまとめておきたい。

まず基礎的な作業として、この技法の時間的・空間的な広がりを把握するために、各地における技法の有無の詳細な調査を進める必要がある。現状では、各地域における代表的な遺跡の、さらに一部の時期について調査したにとどまっており、黒色物塗布技法展開の様相全体を把握できたわけではないため、引き続き各地の様相を調べていく必要がある。特に開始期の北部九州、前期全般の九州・西部瀬戸内・四国の様相は、一部を除いてほとんど手つかずであるため、地域別・時期別の

状況を押さえる必要がある。その結果によっては、地域ごとの差異はなく一様に採用されたのか、あるいは近畿・東海地方が中心となる技法なのかがさらにはっきりしてくると考えられる。さらに同一地域における遺跡差があるのかどうか。こうしたことを調べた上で基本的な展開を押さえる必要がある。その前提作業として、研究者間における黒色物塗布に関する認識の共有化も必要である。

次に、この技法の起源・成立の問題である。夜臼式期における福岡平野周辺での動向について、精査する必要がある。夜臼式新段階において採用された黒色物塗布技法が、福岡平野で独自に生み出されたのか、他の多くの技術と同様に、朝鮮半島からもたらされたものなのかが焦点となるが、現状では判断する材料を持ち合わせていない。夜臼式土器の成形・焼成方法が朝鮮半島の影響を強く受けていることから、黒色物塗布技法についてもその可能性は考慮すべきであろう。朝鮮半島における同時期の黒色物塗布資料の有無を確認するとともに、北部九州における該同時期の遺跡の調査を進めていく必要がある。この点が整理されれば、この技法が朝鮮半島からもたらされたものなのか、福岡平野周辺で独自に成立したものなのか明らかに出来るだろう。また、日本の独自の技術である場合、それが何に由来しているのかも問題であるが、解明するのは難しい。土器だけではなく、木器などの同時期の漆塗り製品についても比較検討していく必要がある。

また、北部九州では、板付Ⅱ式期の黒色物塗布の様相も不明である。しかし、前期末に朝鮮系無文土器に黒色焼成技法が見られ、中期前葉には二日市地峡帯・早良平野・糸島・唐津・嘉穂盆地・豊前などの遺跡で黒色物塗布された資料が出現する⁽¹⁰⁾という。しかし、これらの黒色物塗布資料の黒色物成分・技法が、ここで扱う晩期末～前期の黒色物塗布技法と同じ物であるのかどうかは未確認である。両者の比較検討も行い、一連の関連する事象であるのか、それぞれ別個の事象であるのかを明らかにするべきであろう。

最後に、黒色物質の特定も大きな課題である。この黒色物質の化学組成が何であるのかについては、繰り返しになるが、先述の『山賀 その3』では、漆・アスファルトではなく、「炭素様の物質」で、「炭末そのものあるいは炭末に粘土などをわずかに混ぜ、粘着性をもたせ、土器に塗布したうへ、研磨したものではないかと考えられる」とする。焼成前塗布か、焼成後塗布かは明確な言及はないが、塗布後に研磨したと考えていることから、研磨が土器製作最終段階の工程とすれば、焼成前に塗り込んでいると考えているようである。しかし、筆者も粘土に炭末を混ぜ込んで塗り込んだ状態で焼成実験を行ったことがあるが、完全に消失してしまうことから（写真図版25・26）、有機物であるとすれば、焼成前塗布の可能性は低いと考えており、工楽善通・沢田正昭両氏の見解を支持する。また、漆を濃度を変えて塗布する実験も行い、漆をやや薄めて塗布した場合にかなり似た状態を再現することは出来るが、実際の遺物に付着している黒色物と同一かどうかの証明は不可能であり、実験的な手法では限界がある。最終的には科学分析を行う他に特定することは出来ず、今後進めていく必要がある。

本稿は主に遠賀川系土器にみられる黒色物塗布技法の解明について、わずかに着手したに過ぎない。以上のような問題点を解消していくことにより、弥生時代成立前後の土器に対する黒色物塗布技法の持つ文化的・技術的な意義について解明されていくことが期待される。

謝辞

本稿を作成するにあたり、石黒立人氏には土器の調査に同行いただき、数多くの助言と指導をいただいた。また、愛知県埋蔵文化財センターの堀木真美子氏には、黒色物に関する科学的な分析に関する基礎的な事項をご教示いただいた。さらに、下記の諸機関・諸氏には、資料調査において便宜を図っていただくと共に、各地の土器の概要や研究の動向・本研究におけるご助言をいただいた。ここに記して、厚くお礼申し上げます。（順不同、敬称略）

愛知県埋蔵文化財センター、一宮市博物館、名古屋大学考古学研究室、岐阜県文化財保護センター、各務原市埋蔵文化財調査センター、三重県埋蔵文化財センター、鈴鹿市考古博物館、四日市市教育委員会、滋賀県文化財保護協会、栗東市教育委員会、長浜市教育委員会、京都府埋蔵文化財センター、福井県埋蔵文化財センター、福井県立若狭歴史博物館、小浜市教育委員会、田原本町教育委員会、大阪府文化財センター、茨木市立文化財資料館、神戸市埋蔵文化財センター、倉敷考古館、広島県埋蔵文化財調査室、島根県埋蔵文化財調査センター、出雲市文化財課、鳥取県教育文化財団、山口市教育委員会、下関市教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム、高知県埋蔵文化財センター、高知県立歴史民俗資料館、福岡市埋蔵文化財センター、山形県埋蔵文化財センター

石井智大、石田智子、伊藤実、梅木謙一、小竹森直子、柴田将幹、菅波正人、信里芳紀、藤田三郎、深澤芳樹、三阪一徳

【註】

- (1) 『大和唐古瀬生式遺跡の研究』43 P 京都帝国大学文学部考古学研究報告第十六冊 1943
- (2) 工楽善通・沢田正昭「弥生土器の黒色化手法について」『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告書第30冊 1985
- (3) 「4 弥生土器の紋様 7. 赤彩紋」『弥生文化の研究 3 弥生土器 I』113 P 雄山閣出版 1986
- (4) 工楽氏が夜白単純期の黒色物塗布資料としてあげている菜畑形跡出土の資料は、挿図から『菜畑遺跡』の1550を指していることがわかる。これは最下層の9～12層ではなく、8層出土資料であり、底部も丸底ではなく円盤状である。田崎氏はこれを板付Ⅱ式に位置づけている（田崎博之「壺形土器の伝播と受容」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会 2000）。このため、本稿でもこの資料を夜白古段階の資料としては扱わないこととする。
- (5) 「弥生土器の製作技術 1. 粘土から焼き上げまで」『弥生文化の研究 3 弥生土器 I』39 P 雄山閣出版 1986
- (6) 『山賀 その3』455 P 大阪文化財センター 1984
- (7) 橋口達也編『石崎曲り田遺跡Ⅱ』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第9集 1984
- (8) 山崎純男編『野多目遺跡群 — 稲作開始期の水田遺跡の調査 —』福岡市埋蔵文化財調査報告第159集 1987
- (9) 菅波正人氏のご教示による。
- (10) 石田智子「北部九州地域における黒彩土器の展開」『九州考古学』第88号 2013

【引用・参考文献】

- 安田博幸・奥野礼子「Ⅳ 山賀遺跡出土の土器片に塗彩された赤色顔料物質ならびに、彩色土器の黒色地塗物質の科学分析」『山賀 その3』大阪文化財センター 1984
- 石田智子「北部九州地域における黒彩土器の展開」『九州考古学』第88号 2013
- 藤田憲司「中部瀬戸内の前期弥生土器の様相」『倉敷考古館研究集報』第17号 倉敷考古館 1982
- 工楽善通・沢田正昭「弥生土器の黒色化手法について」『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告書第30冊 1985
- 工楽善通「弥生土器の文様 赤彩紋」『弥生文化の研究 3 弥生土器 I』雄山閣出版 1986
- 橋口達也編『石崎曲り田遺跡Ⅱ』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第9集 1984
- 橋口達也編『新町遺跡』『新町遺跡 — 福岡県糸島郡志摩町所在支石墓群の調査 —』志摩町文化財調査報告書第7集 志摩町教育委員会 1987
- 山崎純男編『野多目遺跡群 — 稲作開始期の水田遺跡の調査 —』福岡市埋蔵文化財調査報告書第159集 福岡市教育委員会 1987
- 松村道博編 福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告書『雀居遺跡3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第407集 福岡市教育委員会 1995
- 山崎純男編『福岡市 板付周辺遺跡調査報告書第21集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第640集 福岡市教育委員会 2000
- 高知県教育委員会編『田村遺跡群』高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1986

- 曾我貴行他編『居徳遺跡群Ⅰ』四国横断自動車道（伊野～須崎間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第62集
高知県文化財団 埋蔵文化財センター 2001
- 島根県土木部河川課・島根県教育委員会編『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ（海崎地区3）』
1989
- 出雲市文化企画部文化財課編『新内藤川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 矢野遺跡 遺構編（第1分冊）・
自然河道・包含層編（第2分冊）』出雲市の文化財報告10 島根県出雲県土整備事務所 出雲市教育委員会
- 中田昭編『大宮遺跡第3次発掘調査概報』広島県教育委員会 1980
- 『神戸市須磨区 戎町遺跡 第1次発掘調査概報』神戸市教育委員会 1989
- 前田佳久他編『神戸市兵庫区 大開遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会・（財）神戸市スポーツ教育公社 1993
- 東奈良遺跡調査会『東奈良遺跡発掘調査概報Ⅱ』1981
- 三好孝一他編『東大阪市所在 巨摩・若江北遺跡発掘調査報告 — 第5次 — 都市計画道路大阪中央環状線巨摩橋
交差点南行車線跨道橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大阪府文化財調査研究センター調査報告書第15集
大阪府文化財調査研究センター 1996
- 中尾智行他編『讃良郡条里遺跡Ⅶ 一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘
調査報告書』（財）大阪府文化財センター調査報告書第187集大阪府文化財センター 2009
- 『山賀（その3）近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人大阪文化財センター 1984
- 中川和哉他編『雲宮遺跡』京都府遺跡調査報告書第22冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997
- 末永雅雄他『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第十六冊 1943
- 小竹森直子他編『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書11 琵琶湖西北部の湖底・湖岸遺跡』滋賀県教育
委員会 公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2014
- 西原雄大他編『川崎遺跡・墓立遺跡発掘調査報告書』長浜市埋蔵文化財調査資料第55集長浜市教育委員会 2004
- 『1986年度栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集』栗東市教育委員会・（財）栗東市文化体育振興事業団 2003
- 『1987年度栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集』栗東市教育委員会・（財）栗東市文化体育振興事業団 2004
- 『1988年度栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集』栗東市教育委員会・（財）栗東市文化体育振興事業団 2008
- 藤田英博他編『荒尾南遺跡B地区Ⅱ』岐阜県文化財保護センター調査報告書第131集岐阜県文化財保護センター
2015
- 『中ノ庄遺跡』三重県文化財報告書10 三重県教育委員会 1972
- 萩原義彦・川崎志乃編『金剛坂遺跡（第4次）・辰ノ口古墳群（第2次）発掘調査報告書』石井智大他編『納所遺跡
Ⅰ — 遺構・土器・木製品編 —』三重県埋蔵文化財調査報告35-3 三重県埋蔵文化財センター 2012
- 三重県埋蔵文化財調査報告188 三重県教育委員会 1999 宮腰健司他編『朝日遺跡Ⅵ 新資料館地点の調査』愛知
県埋蔵文化財センター報告書第83集 愛知県埋蔵文化財センター 2000
- 樋上昇編『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター報告書第92集 愛知県埋蔵文化財センター 2001
- 樋上昇他編『貴生町遺跡Ⅱ・Ⅲ・月縄手遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター報告書第12集 愛知県埋蔵文化財セン
ター 1994
- 永井宏幸他編『三ツ井遺跡』愛知県埋蔵文化財センター報告書第87集 愛知県埋蔵文化財センター 1999
- 土本典生編 元屋敷遺跡発掘調査報告書Ⅰ — 弥生土器編 — 一宮市教育委員会 2008

【写真図版 所蔵先一覧】

- 1 荒尾南遺跡 岐阜県文化財保護センター、2・4 納所遺跡 三重県埋蔵文化財センター、3・12 居徳遺跡 高知
県埋蔵文化財センター、5・6 霊仙寺遺跡 栗東市教育委員会、7 西川津遺跡 島根県埋蔵文化財センター、8 新町
遺跡 伊都国歴史博物館、9・10 板付遺跡 福岡市埋蔵文化財センター、11 野多目遺跡 福岡市埋蔵文化財センター、
13 矢野遺跡 出雲市教育委員会、14 本高弓ノ木遺跡 鳥取県埋蔵文化財センター、15 大宮遺跡 広島県教育事業
団 埋蔵文化財調査室、16 津島南池遺跡 倉敷考古館、17 本山遺跡 神戸市埋蔵文化財センター、18 若江北遺跡
大阪府文化財センター、19 川崎遺跡 長浜市教育委員会、20 唐古・鍵遺跡 田原本町教育委員会、21 丸山河床遺
跡 小浜市教育委員会、22 松河戸遺跡 春日井市教育委員会、23 生石Ⅱ遺跡 山形県埋蔵文化財センター

写真図版



1. 壺 (131 集 No235) の黒色物塗布状況 (荒尾南)

左：外面、中：内面、右：内面拡大 内面に液体状の黒色物が垂れた状況が見られる



2. 黒色物塗布 内部には浸透しない (納所)



3. 黒色焼成 内部にも炭素が浸透 (居徳)



4. 黒色物の残存状況 埋没環境の差による (納所)



5. 黒色物の残存 沈線部分に残存 (靈仙寺)



6. 黒色物の内面塗布状況 (靈仙寺)



7. 内面の黒色物が垂れた状況 (西川津)



8. 新町遺跡 (福岡)



9. 板付遺跡 (福岡)



10. 板付遺跡 (福岡)

写真図版



11. 野多目遺跡（福岡）



12. 居徳遺跡（高知）



13. 矢野遺跡（島根）



14. 本高弓ノ木遺跡（鳥取）



15. 大宮遺跡（広島）



16. 津島南池遺跡（岡山）



17. 本山遺跡（兵庫）



18. 若江北遺跡（大阪）



19. 川崎遺跡（滋賀）



20. 唐古・鍵遺跡（奈良）



21. 丸山河床遺跡（福井）



22. 松河戸遺跡（愛知）



23. 生石Ⅱ遺跡（山形）



24. 実験：焼成前炭塗込み



25. 実験：焼成後